

紫煙

ポルフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

隼鷹と提督の少しばかりのおしやべり

紫煙

目次

1

紫煙

『紫煙』

日増しに空気の冷たくなり、それに引つ張られるように木々の葉も色づきつつあった。体に当たる風も体を包むような柔らかかなものではなくなり、突き刺すかのように感じられるようになっていた。濃紺の軍服は季節を彩る背景にはなるが、寒さをしのぐには少しばかり作りが安物だった。

軍服姿の男からその風に乗せられた一筋の煙が流れていた。男は太く育った木の幹にもたれている。男の口元から流れ出たそれは、空へと昇ることなく流れてゆく。目は白い流れを追うでもなく、移りゆく季節やを楽しむでもなく寒空に身を任せているかのようだった。

「どうしたもんかなあ」

男は口に出すつもりのなかった気持ちが出してしまった。他にでる言葉もない。頭の中にあるのはそればかりであった。捕まえたと思つて、手を開いてみてもそこにはなにもなく、周囲に気配を感じてその方向へと手を伸ばす。そんな端から見たら滑稽なことを頭の中で繰り返していた。

「また、こんなところでサボりかい？」

女の声が目元に届いた。脳内での盆踊りを止め、声の主のいるであろう方向へと視線を向けた。それと同時に手にしていた煙草を地面に押しつけ火を消した。

「なんだ、隼鷹か」

声の音、口調からしてありえないとは思った。しかし、一瞬だけ背筋を冷たいものが突き抜けた。だが、声の主を目で確かめることができ安心へと変わった。

「『なんだ』とはまた随分な言い方すんじゃない。でも、加賀さんじゃなくて安心したろ？」

自分の考えをいとも簡単に当ててきた。

隼鷹。飛鷹型航空母艦二番艦にあたる艦娘である。彼女はどこかつかみのどころのない人物で本来の意味とは違うがポーカークーフイスとも言える。彼女のそれは、表情の変化がないのはそうだが無表情ということではない。見かけるときはいつもケラケラと笑っており、他の表情を見ることがないという意味である。

「提督の考えてることなんてバレバレだよ」

隼鷹はいたずらっぽく口角をあげた。

「そんなに分かりやすいか？」

提督自身としては意識したことはなかった。

「じゃあ、次はさつきまで考えてたこと、当ててみようか？　当たったら何かちようだいよ」

隼鷹はわざとらしい演技で考える振りをした。「ン〜」と、うなるのがさらにわざとらしさに磨きをかける。

「どうせ、分かかってんだろ？　さつきと、言ってくれ」

焦れているわけではないが、提督は答えるよう促した。

「じゃあ、言っちゃおうか」

隼鷹も提督の言葉を待っていたかのように答えた。

「あんときのこと、ずつと考えてたんでしょ？」

提督は意表を突かれた。

自分の胸の内にもみ存在していたはずのことを見事に指摘されて、言葉が出てこなかった。心の内など他人にわかるはずもなく、そぶりも見せていないつもりでいた。当てられはしたが、素直に認めたくもないので、沈黙することだけだ。ただ逃げの一手を打つのみであった。

「だから、考えてんでしょ。　どうしたら良いのかをさ」

隼鷹の攻めが終わることはなかった。むしろ、この話題を簡単には終わらせるつもりなどないかのような意志を提督は感じていた。それは、隼鷹の表情から見て取れた。普

段とは異なる雰囲気を纏っていた。

「そんなこと考えてないって」

隼鷹の意図はどうであれ、認めることはできない。受け入れることなどできない。上司が弱音を吐く姿は害はあつても利をもたらずことなどない、そう考えていた。少なくとも士気を下げるであろうことは疑いようもなかった。

「ああ、傷つくわ。半年経つても信用されてないとか」

隼鷹は、こちらの返事など聞こえていないかのようだった。

「もつとさ、シンプルに考えなよ」

諭すように言葉が続ける。

「辞めらんないんだつたら、どう続けていくかでしょ」

提督自身が幾度なくその前にたどり着いた扉を隼鷹は指し示した。言われるまでもなくそこに考えが及ぶこともある。しかし、そこから先へと進むための鍵を持ちあわせてはおらず、そこから引き返して別の思考の道へと進むことを繰り返していた。

「それが分かれば苦労なんぞない」

思わずして言葉が口を突いて出た。

直接認めたものではないが、ほとんど認めたも同然だった。

「いいじゃん、とりあえず続けてりゃ。ここの奴らはちゃんと仕事してくれるよ」

「そんな雑なもんが通るかよ」

少し前の決意もむなしく、胸の内を見せてしまっていた。自分の情けなさに呆れてしまえばかりだった。

「通るさ。少なくともここじゃあね。そんなぐらいの信用は勝ち取れてるよ」

隼鷹はあつさりと言つてのけた。そこにはいささかの迷いもなければ、打算も感じ取れない。

「過程だつて見てんだよ。あたしらは人でなくても人の体をもつてここにいんだから」
「さ」

人であつて人でないという自覚していてもなかなか口にできないことをさらりと言つてのけた。ここまで屈託なく話されると、少し意地の悪いことを言つてみたいという感情が提督の中にわき起こつてきた。

「その過程になんか見れるもんでもあつたのか」

少々取りづらいボールを投げしてみた。

「この奴らでまだ沈んだやつつていないじゃん。そんだけで十分じゃないのかい」

隼鷹はそのボールを悠々受け取り投げ返してくる。自分から始めた手前、引く気にはならなかった。

「別に優しさでそうなるようにしてきたわけじゃない。戦力が無尽蔵にあるような相

手と戦ってんだ。沈めないで 初めて五分の勝負になる、そう思ってるだけだ」

またしても意図せずして考えをさらけだしてしまった。自身の意志の弱さかがつくづく嫌になる。

「理由はどうあれ、そいつのおかげで旨い酒が飲めるんだからいいよ。 聖人であることなんて求めちゃいないさ」

隼鷹の言っていることが聖人じみていることに言及するべきか否か提督を迷わせてしまう。隼鷹のつかみ所なさの一端に触れた気がした。

「お前、実は酔ってるんじゃないのか。 聞いているこつちが恥ずかしくなる」

知りうる限り、普通は口に出すことをためらうようなことを臆面もなくぶつけてくるため参ってしまふ。しかも、隼鷹はそうされることで戸惑っている提督を面白がっているように感じられた。

今に限って言えば、そうしたストレートな言葉の方が身によくしみる気がした。

「それと、加賀も気にしてるみたいだしフォローしときなよ」

視線は目の前の海に向けながら隼鷹は加賀の名を口にした。

ここ最近、加賀は秘書艦として日常業務の補佐を請け負っている。実際のところは、補佐というよりもダメだし担当といえなくもない状態ではあるが。

「そうだ、当てたんだからなんか賞品ちょうだいよ」

そう言つて手を差しだし催促した。

「くれつて言つたつて、何ももつてないぞ」

さぼりをしてる人間が都合よくモノを持つてゐるわけもない。せいぜい中身の寒い財布ぐらいのものである。

「じゃあさ、その煙草、一本吸わせてよ」

隼鷹は胸ポケットの中身を指さした。

「煙草吸つてんのか？」

自分のところの艦娘に喫煙者がいたことに驚いた。

「そうじゃないけどさ、提督が吸つてんの見てたら吸つてみたくなつたんだよ。ダメ

？」

「別に構わんが、無理して吸うもんでもんないぞ？」

タバコなんでものは特に体に利することなどなく、極論すれば毒を味わつてゐることに他ならない。吸わぬ者に薦める気などさらさらなかつた。

とは言え、強く拒否してしまうのもなんとなく無粋な気がしてしまう。

考えても仕方ないので、胸からライターとタバコを一本取り出し隼鷹に渡した。

タバコをくわえ、火をつける。

その姿が妙に絵になることに提督は思った。

煙が口から吐き出される。

「ん、こいつはあたしには合わないよ。これが美味しいの？」

そう言つて火を地面に押しつけ消した。思つていたものとだいぶ違つたのか顔をし
かめている。

「俺には美味しいもんなんだよ」

提督は吸い殻を受け取り、携帯灰皿へと押し込んだ。

「そういうもんかねえ。まあ、いいや。確かに賞品も戴いたし退散するよ。提督
も早くした方がいいよ。大雨がきそうだし」

「そういうなら、そうするか。もう一本吸つたら帰るよ」

空には雨の気配など微塵も感じられないが、空模様には人一倍気をつかうであろう航
空母艦がそう言うのだからそうなのだろう。

「じゃ、お先に」

幾分か早足で隼鷹は去つていった。

隼鷹の独特の雰囲気は圧倒されたひとときを思い出しつつ後ろ姿を見送つた。

「こんなとこで長々と休憩ができるなんていい身分ね」

突然の苦言に振り返るとそこにはまた艦娘が立っていた。噂をすればなんとやら、で
ある。そこにいたのは加賀だった。

気配らしいものは何一つ感じていなかっただけに余計に驚かされた。

「私の顔に何かついていて？」

つい先ほどの隼鷹の言葉を思い出した。

大雨の件。

そして、加賀も気にかけているという言葉を。

「いえ、何も」

そう提督は答えた。

「なら、早く部屋に戻って頂けますか？ 未処理の書類が残ってるわ」

用件を伝えると加賀は来た道に戻り始めた。

周りを気にかけることばかりに目がいき、周りの人間の心情に気づこうとしない

ことに改めて気づかされた。

そう長いつきあいでもない者をここまで気にしてくれることに提督は感謝した。

「提督にはこの際お話しなければいけないこともありますから」

加賀は向き直り淡々と告げた。

「どうやら雨は長くなりそうだ。」

「今回のことも含めて、隼鷹にも言わなければならぬことがありますし」

隼鷹よ、今日の雨は逃げられないみたいだぞ。

「よろしいですね？」

自分で蒔いた種である。収穫もしますとも。

色々なことが山積みになっていく。執務室へと向かっていく。そこにはわずかな煙の匂いと不要になった荷物が残るだけだった。

(了)